

教職大学院

Newsletter No. 89

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4 2016.10.15

実践研究福井ラウンドテーブル

2016 Summer Sessions の実施報告

福井大学教職大学院 准教授 木村 優

2016年6月24日(金)・25日(土)・26日(日)の3日間、実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Summer Sessions が開催された。

24日(金)プレセッション「教職大学院におけるプロセスコンサルテーション Cycle2」からスタートした今回の実践研究福井ラウンドテーブルは、翌25日(土)午前の「Students' Poster Session」における子どもたちの目を見張るほどの発表によって熱気を帯び、続く ABCD 各 Zone の Sessions へと進んでいった。

そして26日(日)には165名の実践報告者を迎え、参会者総勢547名で実践を語り合い、聴き合い、学び合う Session IVラウンドテーブルが開かれた。

私が日頃より親しくさせていただいているある先生が以前、「福井はラウンドテーブルの『メッカ』ですよ。一度ラウンドテーブルを体験した実践者はその良さを実感して、何度も足を運びたくなるんですよ」とおっしゃっていた。また、別のある先生も「福井でラウンドテーブルを体験した人の多くは自分たち(の職場やコミュニティ)でラウンドテ

ーブルをしたくなるし、実際に企画しています。でも、やっぱり福井のラウンドテーブルを体感するのが私たちにとって一番嬉しいし心地よいんです」とおっしゃっていた。

実践研究福井ラウンドテーブルは崇高な巡礼地ではないけれども、たくさんの実践者が集まって、それぞれの挑戦を心地よく交流し、また真剣に議論できる場である。上記のように表現してくださった先生方には心からの感謝の気持ちでいっぱいである。

次回の実践研究福井ラウンドテーブルは2017年2月17日(金)・18日(土)・19日(土)に開催されます。多くの皆様方の御参会を心よりお待ちしております。当日は、冬の福井の美食もあわせて御堪能くださると幸いです。

目次

- 巻頭言 (1)
- Students' Poster Session (2~6)
- Zone A (6~11)
- Zone B (11~16)
- Zone C (17~23)
- Zone D (24~27)
- 次回の予告 (28)

Session 0 Students' Poster Session

子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来』

福井大学教職大学院 准教授 木村 優

前回の実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions に引き続き、今回も 6 月 25 日（土）10:00-11:20 に Students' Poster Session を開催した。前回と異なり、今回は学校の年間リズムに合わせて規模をやや縮小しての開催となったが、福井大学教育学部附属特別支援学校、福井大学教育学部附属中学校、福井市安居中学校、福井市至民中学校の併せて 4 校から生徒たちにご参加いただき、それぞれの「学校・学び・未来」についてご発表いただいた。生徒たちは皆、大人たちの

目を見張るほど堂々と発表され、聴き手から質問にも丁寧に応えていた。このような生徒たちの発表の様子を観ることで、彼ら／彼女らは学校・家庭・地域での生活とそこでの先生方と大人たちによるたゆまぬ愛情に包まれながら、伸び伸びと学び、成長しているのだと感得した。今回の生徒たちの挑戦の詳細については、引率いただいた先生方にご執筆いただいた以下の原稿から読み取っていただくと幸いである。

Students' Poster Session に参加して

福井大学教育学部附属特別支援学校 教諭 常廣 和美

「高等部のみなさんの中で、高等部で頑張っていることを発表したい人はいませんか？」

そのとき元気いっぱい返事をして手を挙げた生徒がいました。3 年生の T さん。実はこのときは、自分は半信半疑、本当にそんな発表ができるだろうか？発表内容の選定も難しいが、発表そのものもどう練習したらよいか、大人ばかりに囲まれていろいろ質問されて対応出来るだろうか？しかし、担任（本校・岩佐成樹教諭）はとにかく本人が考えてきたこと、感じてきたことを大事にしたいと考え、早速、宿題を出しました。

「T さんが附属でがんばってきたこと、できるようになったことを書いてきてね」

これまでは、その日の活動や行事を振り返ることはあっても、長い学校生活を総じて生徒が振り返ること、また教師がそのような振り返りの機会を設け、その支援をすることは学校としても数少ないことでした。しかし、彼女はこの 3 年間で徐々に成長の階段を上り、変貌を遂げた生徒の一人です。担任は彼女の作文をもとに、写真を見ながら一緒に言葉をつなげていきました。活動したことそのものよりも、彼女はそこで自分が何を感じたのか、どう変わったのかを表現していったのです。楽しかった思い出だけでなく、大変だったことも自分の糧としていたことがこのとき初めて分かりました。写真を選び、順番につなげていくと自然に原稿が出来上がっていきました。

本校の高等部では「仕事」が教育課程の中心で、紙と刷りや焼き物、畑や織物などの活動を行っています。作品作りを通して本人らしさを大事にしつつ、技能や仕事に向き合う態度、人と協力することなどを学んでいきます。産業現場等における実習（現場実習）は、生徒たちが事業所に3週間通い、現場での仕事をさせていただきます。Tさんの発表は3年間の「仕事」と「現場実習」で自分が何を学び、どう考えたかという内容でした。

運動会の練習の合間を縫って、担任との発表練習が続ききました。自分を表現できることに喜びを感じているのでしょう、「練習に行ってきます」と明るい笑顔です。Tさんは文章を読むときに、いつもは間を取らず一気に読み上げてしまうのですが、練習の中で上手に間を取り、呼吸を整えていくことができるようになってきました。修学旅行前日、高等部全員の前でのリハーサルではTさんの落ち着いた凛とした声に全員が聞き入り、終わったときには大きな拍手があり、Tさんは自信を持てた様子でした。

そして、修学旅行から帰った翌日、Tさんは会場の文京キャンパスに元気な姿を見せました。他校の発表にじっと耳を傾けていたTさん、次は自分の番ということも心得ていて練習通りにポスターの前に立ちました。となりで附属中学校の美しいコーラスが響き、よいBGM、穏やかな空気の中、発表が始まりました。たくさんの参加者の方々に加え、前半発表されていた生徒さんも聞く側に回っていました。練習どおりに堂々と発表するTさん、発表が終わると温かい拍手が起こりました。そして優しい空気。質問もTさんが考えやすいように…との思いが伝わるものでした。そのやりとりをいくつか紹介します。

○苦手だったことをどうやってのりこえましたか？…友達と話しました。

○3年間で自分が一番成長できたことは何ですか？…報告できるようになったことです。

○準備が大変だったと思うが、今の気持ちは？…やりきったという感じです…（拍手）

○初めは苦手でもチャレンジして出来るようになったことは？…販売の活動は、初めは難しかったけど2年生になってできるようになりました。

○販売のことを教えてください。…「虹の市」です。前はここ（大学祭）でしました。紙と刷り班ではメッセージカードやプレゼントバック、焼き物ではそば鉢や茶碗、織物は、かばんがありました。コーヒーショップや体験コーナーもありました。

○紙と刷り班の仕事はどんなことをしていますか？…牛乳パックから紙を作ります。ミキサー掛けや紙漉き、印刷などをします。名刺は1枚20円です。

○発表の準備で大変だったことは？…野菜の絵を描いたこと、毎朝、今日のために練習したことです。

○修学旅行はどこへ行きましたか？（えっ？）…TDLが楽しかったです！

今回のチャレンジ、生徒の新たな可能性と、生徒自身が物事を振り返り、先の人生につなげていくことの大切さを改めて知ることとなりました。担任の岩佐教諭の指導に敬意を表し、チャンスをくださった教職大学院の先生方に感謝致します。今日の「仕事」でもちょっと苦手なことにチャレンジするTさん、後輩のよい刺激になっています。

ポスターセッションを通して学んだこと

福井市至民中学校 教諭 宇原 弘晃

昨年度に引き続き、至民中生徒会としてポスターセッションに参加させていただいた。クラスター長3人をポスターセッションに参加させていただいた。私自身、ポスターセッションに参加するのは初めてであったが、一部の生徒が昨年度参加をしており、前回の発表の様子を聞きながら準備を進めてきた。

まず生徒たちに「至民中の何を語りたい？」と問いかけた。すると、生徒たちから「学校のつくりを伝えたい。」「至民祭(学校祭)を語りたい。」「クラスターの行事もいいね。」と、語りたい意欲に溢れている様子であった。話し合いの結果、ポスターを3枚使い、①全体的な学校紹介(教科センター方式・異学年型クラスター制・校舎)、②中央委員会(生徒会)の取組、③地域とのつながりの3つの柱で紹介することに決めた。それぞれ3分程度発表し、発表後に質疑応答の時間を設けることにした。準備は昼休みや始業前の時間に行った。本番1週間前には、プレ発表会を行い、生徒たちがお互いに発表のアドバイスをし合った。

当日は安居中学校・附属中学校・本校の順で発表することとなった。何より驚いたのは、両校の生徒たちが、原稿を見ずに、自分の言葉で学校を語る姿である。質問に対しても、取組に対する思いを熱く語っており、自

分たちの取組に誇りを感じている様子が伺えた。自信を持って語る姿に本校の生徒たちも圧倒されている様子であった。

発表の順番が回ってくると、生徒たちは緊張しながらも発表することができた。また、質問に対して彼らながらに知恵を出し合い答えようとする姿は素晴らしいものであった。発表直後、生徒たちは「あまりうまく伝えられなかった」と悔しそうな様子であったが、大学の先生方から「至民中いいね」「至民中の生徒になりたい」などのお褒めの言葉を頂き、誇らしげな表情を見せてくれた。

その後の「交流タイム」では、他校の生徒たちと歓談し、今後の生徒会活動に繋がるアドバイスをもらったようであった。

今回ラウンドテーブルという場で、至民中について発信する機会を頂き、生徒たちは改めて至民中について見つめ直し、彼らの取組の意味に気づいたようであった。また、語る場を通して、生徒たちに学校のリーダーとしての自覚も強まり、今後の活動への意欲も喚起されたようであった。今後、他校の実践も取り入れながら、生徒活動の充実を図るとともに、胸を張って学校を語る生徒を育てていきたい。



生徒ポスターセッションから学んだこと

～語ることの意味、語ることを通して～

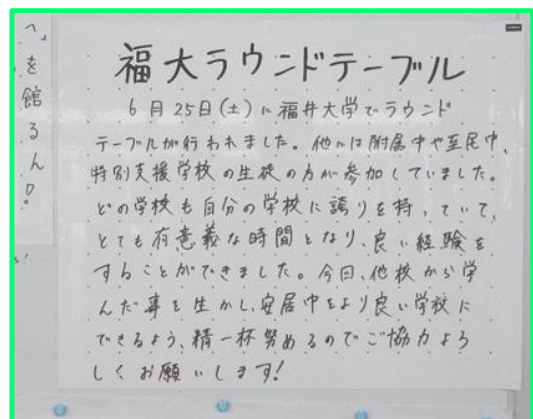
福井市安居中中学校 教諭 高松 由紀子

ラウンドテーブルの生徒ポスターセッションに、今年も本校生徒が2グループ参加させていただいた。一般のポスターセッションに混じり、安居中や附属中の生徒が参加したのが発端となり、現在行われているような児童・生徒だけの発表の場が設けられたと伺っている。私自身、2年前の冬のラウンドテーブルに、生徒の様子を軽い気持ちで見に来たところ、安居中の良さや活動を自分の言葉で生き生きと語る姿に、我が校の生徒ながら衝撃を受けたのを覚えている。と同時に、ふと心の中に一つの疑問がよぎった。「安居中の生徒は、なぜ自分の言葉で語れるのだろうか・・・」

その素地をつくったのは、紛れもなくこれまでの安居中の生徒や先生方だ。先輩後輩の垣根が低いという関係性をうまく生かし、自由な雰囲気で見聞を言い合いながら生徒会活動そのものも行われてきた。今回のポスターセッションも、3年生が2年生をリードしたり支えたりするのはもちろん、みんなの意見を尊重することを最も大切にして準備することができた。さらに、今までの反省を生かし、単なる学校紹介をするのではなく、現在の生徒会活動やそれに対する自分たちの思いや課題を中心に話を組み立てようということになった。だから、前回より内から湧いてきた言葉を大事にして語る事ができたのではないかと思う。

生徒の姿を通して、ポスターセッション発表がゴール(目的)ではないということも再確認できた。そこに行き着くまでのたわいもない話し合いややりとりを繰り返す中で、自然と自分たちがたどってきた歩みや取組が省察され、安居中が大切にしたいことが明らかにされていく。その営みがあったからこそ、生徒が本当に価値があると思ったことや実感していることを自分の言葉に載せることができた。そして、他の学校の発表にも真剣に耳を傾け、臆することなく質問できたのだと思う。

ポスターセッションに参加した生徒は、翌月曜日には、生徒会の掲示板に右のような文章を書き、全校生徒に向けて発信していた。その言葉の中には、他校の発表から学んだこと、自分の学校をより良いものにしていこうという決意等が綴られていた。発表や他校の生徒との交流で生まれた熱い気持ちを冷めない



ちに文章化することで、より強いメッセージとして伝わってきた。

生徒の姿から、安居中を支えてきた学びやこれからも大切にしたいことが垣間見えた気がした。語ることでしか、真意は伝わらないこと（覚えていることをただ発表するだけでは、言葉に魂がこもらないと生徒も言っていた）。語ることは考えること（自分の学校について考え、議論を重ねたから語れるようになる）。語る力をつけるには、良い聞き手になること

も必要であること等々。発表の中心となった3年生が入学した2年前は、語ることからは程遠い姿で、原稿がないと話せないどころか、人前に出ることそのものに強い抵抗感を示す生徒が多かった。しかし、安居中で学ぶことにより、時間をかけて少しずつ育まれていき、今回の姿になっていったのだと思う。語ることを通して、生徒のそして学校そのものの可能性がもっと広がっていくのをおぼろげながら感じている。それが何であるのか明らかにできるようにしていきたい。

Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

チームで「育ち」を支える

福井大学教職大学院 准教授 小杉 真一郎

Zone Aでは、前回までと同様、「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマとし、サブテーマとしては新たに『チームで「育ち」を支える』を掲げました。「チーム学校」ともいわれるように、学校内の教職員はもちろん、学校外の関係機関や地域とも協働しながら、実践を積み重ねていくことは、大きく変動する21世紀を生きる子どもたちのための教育を支えるためにも、多忙化する教師たちにとっても、重要であることはこれまでのラウンドテーブルでも何度も認識されてきたことではあります。しかし、教育現場では、「チーム」で取り組むことがかえって教師の多忙化を招くのではないか、実際に取り組む際にはどうしても特定の個人に負担がかかってしまうのではないかなどの不安が払拭できないという意見も根強くあることも事実です。

そこで、今回は、現場で行われている「チーム」による協働的实践を取り上げ、その有効性や可能性、そして子どもだけでなく、教師、学校全体、さらには地域や社会、そしてチームそのものの「育ち」についても参加者のみなさんと深く考えてみようという企画にしました。

まず Session I のポスターセッションでは、県内外から「チーム」での学校づくりの実践報告がありました。加えて、県内の中学校や特別支援学校の生徒による「生徒たち自身による学校づくりや協働の学び」の報告もありました。各校の生徒が報告を行うたびに、人だかりの山ができましたが、大勢のオーディエンスに囲まれながらも堂々と報告し、質疑にも凛として応じる姿に将来の福井、未来の日本に明るく力強い希望を感じることができました。

SessionⅡのシンポジウムでは、福井市啓蒙小学校校長川崎清美氏、板橋区立赤塚第二中学校教諭岡部誠氏、福島県立ふたば未来学園高等学校教諭對馬俊晴氏の3名の先生方から、教育現場でのチーム作りと「育ち」について実践報告をしていただきました。川崎先生は、保育園・幼稚園からの外部機関と保護者がチームで行っていた気がかりな子どもへの支援を、学校が引き継ぐことにより、抵抗感なく校内外の協働が機能し、その有効性を実感できたからこそ、新たに今度は校内でもチームが立ち上がり、教科や総合的な学習の時間においても地域との協働が次々と進んでいる現状を報告していただきました。また、岡部先生からは、生徒指導困難校だった学校に教科センター方式を取り入れながら、それだけ頼るのではなく、アンケートを活用しながら先生方の思い、生徒たちの思いを一つにしてともに学校を作っていく経緯や、地域の福祉施設や農業施設や文化施設などと連携した職業体験を行っている報告をしていただきました。對馬先生からは、原子力災害から復興を目指す地域の高校として、創造型教育と銘打って、独自のカリキュラムを編成し、「原子力防災」「再生可能エネルギー」「アグリビジネス」など5つのテーマのもと生徒の研究活動を行いながら、地域企業や行政とかかわり合いの中で思考力、表現力、実践力、協働力などの育成を目指しているという報告をしていただきました。いずれの学校も地域の力を学校に取り入れな

がら「チーム学校」として実践を行い、子ども、教師、学校、地域社会が互いに育ち合いながら、教育活動を進めている熱い報告でした。

SessionⅢのフォーラムでは、シンポジウムでの3名の先生方の報告を受け、66名の参加者が自分自身の実践報告と照らし合わせて考えたことを5～6名のグループに分かれて意見を交流し合いました。学校の中でも同じ思いで協働していくチーム作りの難しさ、一方でチームとして学校の中だけでなく地域なども巻き込んで協働できたときのダイナミックな学びの実感や充実感などが話し合われました。今回は、教育の現場での実践経験がほとんどない学部2年の学生も参加していました。でも、現在取り組んでいるライフパートナーの経験や自分たちの児童生徒だったころの思い出をたどりながら、「子どもたち自身も支援が必要な子たちを自分たちで考えて支えられるようにならないといけないのではないか」

「子どもたちも人の好き嫌いがありながらも協働し合う姿がある」などといった教師とは違う視点で、「チーム」としての学びを一緒に考えることができたことも大変意義深く感じました。そうした意見を聞きながら、「だからこそ大人が勇気をもって協働する姿を見せないといけないのでは」などと教師たちも新たな「育ち」を実感することができたフォーラムとなりました。

Zone A 学校に参加して

山梨県総合教育センター 主幹・指導主事 廣瀬 志保

「チームで『育ち』を支える」というサブテーマに惹かれてZone Aに参加しました。はじめに岸野麻衣先生が「問いを深める。緩やかに領域を越えて交わる。いろいろな実践

に出会う。多様性を受容する。」という目的の確認をしてくださり、ポスターセッションに向かいました。校種や職種を越えてどの取り組みにも「子どもたちの育ち」を感じるこ

とができました。続いての小中高の実践発表では、教師同士、教師に生徒と保護者を加えた学校全体、学校に地域を加えた地域全体を「チーム」としたダイナミックな実践事例の発表が続き、最後にグループで意見交換をしました。

実践報告の福井県立啓蒙小学校の川崎清美校長先生からは、週1～3日は校長として地域の会議などに出て、田植えを通じた連携を20年余り続けている小学校の実践を伺いました。地域との垣根を低くして、目標とする子ども像を地域と共有していることが子どもたちの学びに向かう力となっているのだと感じました。

板橋区立赤塚第二中学校の岡部誠先生からは、スクールリーダーとして、教科センター方式をはじめた学校改革の発表がありました。「校長が言いたいことをスクールリーダーが言う。指示でなく相談できる上司。そこに同僚性が生まれる。」という言葉の通り、会場には同校の先生方が多数応援に駆けつけられていました。仲の良さと、同じ方向を向いて学校改革をされている様子が伝わりました。

Zone A 学校のセッションで感じたこと、学んだこと

福井大学ラウンドテーブルに初めて参加して感じたことは様々な実践を一度にたくさん交流することができる貴重な学びの場である、ということです。特に、一番印象に残っているのは、東京都の赤塚第二中学校の報告でした。生徒指導が大変な公立中学校は全国的にどの地域にも見られますが、学校が抱える課題に対して真っ向から改善を試みる中で教師の学

福井県立ふたば未来学園高等学校對馬俊晴先生は、同校は原発から30キロ圏内にできた新設校で、1年生は「産業社会と人間」で演劇創作をし、2、3年生は総合的な学習の時間5単位と学校設定科目2単位を合わせて地域課題解決学習に取り組むことで、コミュニケーション力、論理的思考力、創造的思考力を育成しているという発表がありました。地域と学校がつながり、復興に向けてコミュニティの再構築をしていることがわかりました。

グループでは、大学2年生の堀さん、M1の佐藤さんから、学生として現場を体験して感じたチームの力についての発言があり、私の気づきにもなりました。

これまでの私にとってチームとは、学年、分掌、学校でしたが、Zone Aの学びで縦糸を幼保小中高大という発達段階のつながり、横糸を学校から地域や世界に広がるつながりとし、縦横の糸を紡いで、生徒の育ちにつながるチームができるのだと実感しました。

札幌市立栄中学校 教諭 渡辺 宏輝

びを組み替えていく組織的な実践として大変興味深く拝聴しました。

区から指定を受け、福井大学と連携を深めていく経緯や、学校の教育活動を見直し、編み直す過程で、報告には上がらない部分も含め、想像を絶する大変さ、葛藤があったと推察されました。その中に合っても困難を乗り越えて学校をチームとして機能する組織として編成し直しておられる先生方には敬服するばかり

りです。学校全体としての組織改善において生徒と教師の学び中心に据えてそれらを豊かにしている取り組みでした。

赤塚二中で興味深いのはそれを実現するために学校全体で他の機関と連携しながら組織として包括的に取り組まれている点です。学校改善の取り組みでよく見聞きするのは、どれも教科指導や特別活動等の個別の分野に特化され、部分的なもの、個人的なものが多く、言い換えれば、まだまだ包括的な取り組みが少ないと感じています。もちろん、教師一人ひとりの個別の実践が最も重要で尊重されるべきものです。ただ、一つ一つの実践、一人ひとりの実践が一つの学年・学校としてのヨコ(空間)のつながりとして見た時、年度を経て子どもたちが成長していくタテ(時間)のつながりとして見た時にどんな意味があるだろうか、ということに大きな関心があったためです。

そのような組織改善を進めていく中で「誰が」中心となっていくのか。学校におけるリーダーシップを考えた時に、今回のお話の中で指導教諭、主幹教諭、各主任職の「ミドルリーダー」としての役割が重要と感じました。どの学校も抱える課題は多岐に渡り、校長・教頭などの一部のスクールリーダーだけで指導性を発揮し、教師集団をつかさどっていくには限界があります。教科指導、生徒指導、特別活動、進路指導等、それぞれの領域において専門的な力量を持つ中堅教員が「ミドルリーダー」として様々な場面において教師集団を引っ張っていくことが求められています。その一つのモデルとなる姿を赤塚第二中学校の実践から学び取ることができました。

また、「どこで」学校の組織改善を進めるのか。それはやはり校内研修であると感じます。リーダーたちが日常的に一人ひとりの教師と関わりをもつことだけでなく、公的に位置づけ

られた教師集団の学びの場で課題意識を共有し、方向付けをしてこそ、組織として学校が機能していくのだと思います。授業研究はその中核ですが、それ以外にも様々な教育課題についての研修であったり、それを外部の講師を招聘することだけでなく、教師自身が学び合い、高め合えなければなりません。中堅教員がそれぞれの専門性を生かし、そのリーダーシップの中で一人ひとりの教師の実践がつながり、さらに豊かになっていくことが子どもたちの信頼を得て豊かな学びを保障する場づくりにつながっていくのだと感じました。

これらを支えるための教師一人ひとりが動きやすい校務分掌の見直し、学校の年間計画の見直し(行事の精選も含めて)も重要な課題です。主には教務主任、主幹教諭の仕事となります。学校改善は「走っているバスを走らせたまま修理するようなもの」と例えられることがあります。多忙化が進む中で学校の教育活動を豊かにしていくためにはこれまでの実践を振り返ったり、今後のことを考えるための「時間」を意図的に生み出す必要があります。学校において効率化を図るということにはいささか抵抗を感じられる方もいるかもしれませんが、忙しさは増す一方で新しい事、取り組まなければならないことも山積しています。子育て世代の先生や家族の介護が必要な先生も今後増えていきます。その中で、一部の教師に過剰な負担が集まる現状を打開し、教師同士が協力と連携を深めていく「知恵」を絞らなければなりません。改革にしっかりと向き合うだけの場をいかに設定するかという課題も大前提として必要なのだと改めて感じました。

このような学校におけるリーダー実践や経営実践、「組織としての学校」について、今後さらに理解を深め、学び続けていきたいと思っています。

省察する同志

長崎大学教職大学院1年 猪子 夏菜子

わたしは、多くの悩みと課題を抱えていま、教職大学院に来ています。この福井の「実践し省察するコミュニティ」に初めて参加させていただき、強い衝撃を受けました。現場では淡々と日々の業務に追われ、ただ毎日の教育を繰り返していただけでしたが、福井で様々な方々と出会い、日々新たな教育に挑戦されている実践をお聞きし、胸が熱くなりました。学校現場の学級で教育を行う際は、一人の孤独な戦いだと思っていました。ですが、実はそうではなく、自分が戦っている間にも、全国各地に同志がいる、同じように子どもたちを思い、そのときそのときを精一杯に生きているということがわかりました。

今回は、Zone A (学校)に参加しました。「子供たちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」～チームで「育ち」を支える～ということで、まさにこれからの教育は、チームで活動することが必要なのだとわかりました。一人では孤独です。限界があります。そして、壊れやすい……。同志を見つげともに省察していくことで、様々な新たな価値が生まれます。壊れそうなときには、同志との絆が自分を救ってくれます。そして「育つ」ことができます。子どもの「育ち」と共に、私たち教師も「育つ」必要があり、そして学校にも新しい「育ち」が求められています。そのことについて出会ったメンバーと共に考えました。

シンポジストのお話では、地域との連携や、スクールリーダーについて、さらには具体的な総合学習の実践を聞くことで、学校の「チーム」としてのあり方について学びました。その話から考えたことは、「何かを変えようと思ったなら、まずは動くこと、しかも小さなコミュニティから」ということです。これまで、「一教師

の自分が何をしても学校は変わらない」との認識でしたが、そうではないと思えるようになりました。「小さな波がいずれ海岸に打ち寄せるように、波は少しずつ周りに広がり、どこへでも伝わっていく」その波が必要であり、自分はその一部になれるのではないかという可能性を感じられるようになりました。

シンポジウムでの話題提供を受けて、グループでの交流を行いました。その中で感銘を受けたのが、森田先生(中学校)の実践についてです。わたしの勤務校では、見せるための校内研修になってしまっており、卒にとらわれすぎて教師が意欲的に活動できていないという現状があります。森田先生の学校では、そうではなく、飾らない校内研修になっており、その実践が教師自身のためになり、すぐ子どもに返せるものでありました。定期的に教師同士の話し合いの場を設定し、小さなグループで思ったことを言える雰囲気を作られているとのこと、研究のテーマを縛りすぎず、そのときの子どもの実態により自由に内容を決められること、指導案がメインではなく、話し合いを重視し、略案で授業を行うということ、1年間のまとめとして、それぞれ自由な形でA4レポートを作成し、綴るとのこと(指導案でも感想でも良い)でした。また、チーム作りの手立てとして定期的にみんなでスポーツをしたり、お茶をしたりする時間を作っているとのことでした。わたしの勤務校の校内研修は、形に縛られすぎて、どちらかというやらされている感が強いように思います。もっと教師自身が、主体的に取り組める校内研修ができたらいいなと思います。そのためには、学校がよい「チーム」になり、教師同士がつながる必要があると考えます。

最後に、今回の福井ラウンドテーブルに参加して思うことは、学校もそうですが、自分自信が変わることを恐れてはいけないということです。変化には、批判や中傷はつきものです。それをマイナスととらえるのではなく、むしろよりよいものに変化する前の、助走であり必要なものであるというプラスのイメージでとらえることが大切だと思えるようになりま

した。自分の正直な気持ちを話し実践を聞いていただくことで、自分が認められたといううれしさが込み上がってきました。涙が出そうになりました。どの方も、それぞれの人生を懸命に歩まれていることを知り、もがいているのは自分一人ではないとわかりました。この学びを心に刻み、いまこのときから、新たな歩みをはじめていきたいです。



Zone B 教師教育

B1 「学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問う」

福井大学教職大学院 教授 倉見 昇一

私からは、Zone B1 で行われたシンポジウムの概略について報告いたします。現在、教育改革の大きな展開の中で、学校の組織文化を踏まえつつ、改革への長く広い展望を持ち、長期的な学校改革への広汎な協働を生み出し支えていく、新しいスクールリーダーシップが求められています。そこで、Zone B1 では、「学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問う」と題し、これからの組織マネジメントの在り方やマネジメントリーダーに求められるもの、またその養成などに

ついて、加治佐 哲也 氏（独立行政法人 国立高等専門学校機構監事・前兵庫教育大学学長）、柳澤 好治 氏（文部科学省高等教育局 大学振興課教員養成企画室長）、遠藤 富美夫 氏（福井新聞社論説委員長）、三田村 彰 氏（福井大学教職大学院教授）の4名によるシンポジウムを行いました。

まずは、三田村氏から、福井大学教職大学院が今年度から立ち上げた「学校改革マネジメントコース」について、このコースが、管理職になることを前提とした教員を対象にし

たものであること、本学教職大学院の特徴である「学校拠点方式」により自分の勤務する学校の課題の解決策を探ったり、共通の課題を持つ院生とのチーム研究を行ったりする中で、学校組織マネジメントの実践について学ぶことなどの説明がありました。

加治佐氏からは、兵庫教育大学の「学校経営コース」について、その設置の背景や現在の取組のほか、構想力や開発力、コミュニケーション能力といった管理職に必要な資質能力についてのお話がありました。

柳澤氏からは、ほぼ全国に教職大学院が設置される状況になったこと、管理職を養成する上で大学が持っている広いツールをうまく活用すること、大きな社会状況の変化の中で管理職に求められることなどについてお話が

ありました。

遠藤氏からは、教員の多忙化と管理職の在り方、福井県における人口減少や高齢化、学校統廃合といった状況の中での学校と地域との関係性などについてお話がありました。

会場の参加者からは、「管理職としての資質能力を何をもって測るのか」といった質問が出され、加治佐氏から、管理職はアウトプットではなくアウトカムで評価するのが望ましいが実際それは難しいこと、第三者評価なども一つの方法として考えられることなどのお話がありました。

シンポジウムに引き続いて行われたフォーラムでは、参加者が少人数のグループに分かれ、シンポジウムを受けての議論が活発に交わされました。

福井ラウンドテーブルに参加して

文部科学省大学振興課教員養成企画室教職大学院係 大塚 稔宜

私が参加したZone B1「学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問う」では、福井大学で今年度より開設された管理職養成を前提とした「学校改革マネジメントコース」の取り組みや、今後の教職大学院における管理職教育のあり方について、福井大学、教員養成系大学、文部科学省、報道関係それぞれの立場から考察するよい機会であったと感じている。

平成28年度に新たに18校の教職大学院が設置され、来年度以降にも教職大学院の設置が予定されている。これによりほぼ全国に教職大学院が設置されることになり、今後は教職大学院それぞれの独自性が求められていくことになると思われる。その中で明確に管理職の養成を謳っている教職大学院は福井大学を含めまだ少数であることから、福井大学は今後の教職大学院における管理職養成のモ

デルになり得る教職大学院として期待をしている。

印象的であったのは福井大学が築いてきた教育委員会や拠点校、地域との緊密な連携・指導体制である。教育現場における学校改革に対する意識の高さ、改革を実行しようと学校ぐるみで取り組んでいる意欲と実行力、それを支える福井大学と教育委員会という構図は、教職大学院での学びに有効に機能していると感じた。この点においても、福井大学は今後の管理職養成を行う教職大学院のモデルとしての役割を果たせるのではないかと思わせるものであった。

また25日のセッションⅢ、26日のセッションⅣについては、教職大学院に通う現職教員学生、学部学生、教育委員会など異なる立場の者が集まり意見交換をすることができ、また両日パネルなどで公開されていたポスタ

セッションでの各地の実践研究の紹介について触れることができた。こういった様々な立場の経験や知識、意見、事例研究の共有することは、参加者の見識を広げると同時に、教職大学院の目指す「理論と実践の往還」につながる機会でもあると感じた。

福井ラウンドテーブルは今年で16年目を迎えるとのことであるが、福井大学におかれ

ては今後もこのような機会を通じ、教職大学院での取り組みや研究、教育における課題について、対外的に発信し続けていきたいと思う。

最後に、この度ラウンドテーブルに参加する機会をいただき感謝申し上げます。ありがとうございました。

実践研究 福井ラウンドテーブルに参加して

山梨県総合教育センター 指導主事 篠原 弘一

今回はじめて、福井ラウンドテーブルに参加した。詳しい内容もよくわからない中での参加であったが、どんなことが待っているのかわくわくした気持ちで福井駅に到着した。会場の福井大学は、たくさんの人の熱気で溢れていた。その中で「実践し省察する」ことができた。

1日目に参加したシンポジウムは、「21世紀の教師教育をイノベーションするー学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問うー」としたZONE-Bであった。変わろうとしている教育に対応するためには、長期的な学校改革が必要になる。一昔前は、スーパーティーチャーがいて、子供たちと素晴らしい関係を作り…という時代があった。そのため、一人一人が「力をつけて」ということが求められた。しかし、現在はチームで取り組んで行くことが求められている。そのため、マネジメントの必要性、リーダーの存在がクローズアップされてくる。

シンポジウムの中で、福井大学教職大学院

の三田村彰氏は福井大学で行われている幅広い養成内容の中で、ミドルリーダーの育成がキーワードになっていること、国立高等専門学校機構の加治佐哲也氏は、学校現場を離れて大学等でしっかりと研修を行うことで、様々な知識・実践力が得られること、文部科学省高等教育局の柳澤好治氏は、管理職コースのある大学の実態、また、そこで培っていく内容として、地域住民や関係機関との連携をあげていた。福井新聞の遠藤富美夫氏からは教職員の多忙化解消とリーダーの役割についての話があった。自分自身が、企画・運営に関わっている研修会が、一人一人の先生方の知識や実践力の向上、ミドルリーダーの育成、マネジメント力の充実に役立っているか、話を聞きながら、改めて振り返ってみた。続くフォーラムでも、それぞれの立場で自分の経験してきたことをファシリテーターが言葉をつなぎながら議論を進め、参加者の想いや実践を語り合った。居心地の良い時間を共有し、充実した時間を過ごすことができた。

ラウンド・テーブルに参加して

福島大学人間発達文化学類 野崎 修司

福島大学では、教職大学院をスタートさせるに当たり、解決しなければならない課題の一つに、ラウンド・テーブルの運営があります。既に、二度ほど試行してきましたが、これで良いという確信が持てませんでした。今回、6名の者が参加をし、ラウンドテーブルについて学びました。

一日目のポスターセッションでは、新潟大学教職大学院のポスターセッションに参加しました。新潟大の場合、現職教員が現任校に籍を置きながら大学院で研修を受ける方式でした。学校課題や実践的な研修がし易いこと等々メリットが多いと考えていましたが、研修者と教員との境が曖昧になるようで、別な課題があることが分かりました。

続いて、ZoneB1のシンポジウムでは、「マネジメントリーダーを育てる」をテーマに、基調提案とパネルディスカッションが行われました。①教職開発専攻コース、②ミドルリーダーコースの他に、③学校改革マネジメントコースを追加した現状についての説明があり、本学でのコース設定との比較で、留意すべき点をご示唆いただきました。

ZoneB1のセッションⅢでは、学校経営上の課題がテーマとなり、様々な視点から、聞き手の経験を踏まえた語りがなされ、学ぶところが多い時間となりました。

二日目のラウンド・テーブルでは、参加者が300名を超すことが分かり、前日までの調整の大変さを感じました。また、受付の様子からリピーターが多いことも分かりました。このラウンド・テーブルに対する参加者の強い思いも感じ取ることができました。

今回は、特にファシリテーターの役割を学ぶことが私の中心課題でした。ファシリテーターの半原先生のリードの在り方にただ感心でした。語り手から核心を引き出すことは至難の業と思っておりましたが、その引き出し方に感動しました。「語り手に寄り添う」とはこの様なことと感じました。一方、我々にとって初対面の語り手に寄り添うことは至難の業であることは確かです。奥が深いことを感じました。

様々なことを学んだ二日間でした。本当にありがとうございました。

B2 これからの学部段階の教員養成を考える

— 実践を聴き、夢を語る —

福井大学教職大学院 准教授 大西 将史

私のグループのメンバーは、仁愛大学人間生活学部の西出和彦先生（生物学）、本学教職大学院のエリザベス・ハルトマン先生（数学教育）、玉川大学教職大学院の石井恭子先生（理

科教育）、早稲田大学人間学部2年生の戸張裕康さんの5名でした。

最初にハルトマン先生からワシントン大学における教師教育の実践についてご報告いた

できました。米国の従来の教師教育プログラムは、日本のものと同様に、大学での理論的な学びの後で現場での実習に臨むというもので、両者の間に乖離が生じてしまう問題があったため、ワシントン大学では、両者を効果的につなぐための方法として、数年前から実践を基礎とした教師教育を進めているそうです。教員養成課程を修士まで延長し、学部段階では大学で理論的な内容を中心に学び、修士段階において、ユニークな実習を行っています。それは、朝の時間帯に大学で模擬授業に当たる内容の授業研究を行い、そこで立てられた授業計画をその直後に学校現場で実際に実践し、午後から大学に戻ってその振り返りを行うというサイクルで行われます。そのサイクルが日替わりで教科を変えて半期間（もっと長かったかもしれません）続けられるというものです。この実践には、大学教員だけでなく大学院生や実習協力校の教員が参加し、協働で指導を行うということも特徴的です。

西出先生からは、先生ご自身が単独で担当されている小学校理科教育法（基礎生物学）についての授業実践をご報告いただきました。科学的思考ができる子どもを育てられる教師を育てるために、反転授業（講義内容をビデオ撮影しておいたものをHPにアップし、学生がそれを予習して講義に臨む）、授業への質問を随時HP上で募集・回答・公開するシステムの

構築、学生が自分たちの力をフル活用して臨める課題の設定（2階から卵を落としても割れない容器をチームで作成、学生一人一人がメダカを飼育する）等、手間と工夫が凝らされた授業実践をされています。そして、それらを支える思想として、学生にいかにして本質的な学びをさせるか、その具体的な方法は何が適切かといった問が常に根幹にあることをご報告いただきました。

私は、学部改組にともなう初等教育課程の改革をどのように行っていくかという比較的大きなテーマを持ってこのラウンドテーブルに臨みました。ハルトマン先生のご報告はまさにその部分に該当する内容で極めて刺激的でした。その一方で西出先生のご報告は、個々の教員がいかに充実した授業を提供するかという点において悪戦苦闘されている姿を見せていただいた気がして、一教員としてその重要さにはっとさせられるものでした。ディスカッションでは、教員養成課程というマクロなテーマと教員個人々の授業実践という比較的微視的なテーマを往復しながら、そこに教師教育に係わる様々な専門家の協働というキーワードは導く出すことができましたが、それをさらに深めるような具体的な案も含んだ議論は私の手に余るもので、次回に期待したいところです。

もがき続ける日々

仁愛大学 准教授 西出 和彦

「私は『力』という言葉は使わない。『力』ってなんですか？」

「私は、『技術』と表現している。『技術』はある。」・・・

三人が立っているところに、ある議論が始まりました。三人のうちの一となった私は、実際には、お二人の議論の間に入って、双方の

主張を理解しようと努めたに過ぎませんが、私にとって、とても心地よい時間が流れました。

なにより、私にとって重要だったのは、ひとつひとつの言葉を捕らえ直し、考え直す時間がもてたことです。その時間は、それからまも

なく私の頭の中で、いろいろな考えを刺激していきました。まさに、触発された訳です。

立場やアプローチが違うことで、考え方や主張が異なる様子を間近で拝見しました。また、一見異なった主張のようで、実は、言葉の使い方や表現が異なっているだけの場合も起こりえます。いずれにしても、とても刺激的でした。

私は、教育には常に新しいアイデアが必要だと思っています。

教育の世界では、事象間の因果関係は必ずしも明快に表出しないのではないかというのが私の考えです。そのような認識の中で、「それって、どういうこと？」と問うても「分からない」という答えが返ってくる 경우가多く、もがき続けることになります。うまくいく場合もあれば、うまくいかない場合もあるからで

す。だからこそ、常に新しいアイデアが必要になります。

冒頭の模様は今回の懇親会での一幕ですが、ラウンドテーブルを含めて、異なる見方や考え方に会ったことによって、新たな発見や新しいアイデアにつながりました。考え方や主張の違いが対立にならず、違いを認め合いながら、議論が進みました。だからこそ自分にとって新たな発見と感ずることがあり、アイデアが浮かんだのではないのでしょうか。多様であることの重要性を感じます。このような機会に参加し、率直な意見交換を行い、自分の考えを整理することこそ重要なのだと私は思います。

有意義な時間をいただきまして、本当にありがとうございました。



Zone C コミュニティ

学び合うコミュニティを培う

C1 持続可能なコミュニティをコーディネートする

若い世代と地域を結ぶ

福井大学教職大学院 特命助教 半原 芳子

AOSSA を会場とした「若者と地域 (C1)」は、主に福井大学の学生をはじめとする多くの若い世代と、その若い世代の取り組みを支えようとする社会教育にかかわる方達で賑わいました。Session I のポスターセッションでは、福井大学の学生による「探求ネットワーク」の活動や福井市・越前市の公民館およびふくい市民国際交流協会の取り組みが報告されました。探求ネットワークは主に一年生が報告者となり、始めたばかりの自分達の実践を自分なりの言葉で跡づけながらその意義を探ったり確認したりしているように見えました。公民館主事さんは、ご自分の地区の特性や、特に大事にしている取り組みについて、県外の方そして若い世代である探求ネットワークの学生達に伝えていらっしゃいました。

Session II のシンポジウムでは、一般社団法人みやぎ連携復興センターの高橋若菜さんとさこう工務店店長の児川朋香さんをシンポジストとしてお招きしました。福島出身で現在宮城の復興支援にかかわっていらっしゃる高橋さんは、地域との出会いをご自分の大学時代からの経験を辿りながら丁寧に語ってくださいました。震災によって分断された力を集めるのではなく、もともと地域の方達が持っている力をどのようにつないでいくかを大事にされていること、また、世代が継承され

るようにと、高橋さんご自身も若いのに同世代あるいは少し年下の世代の取り組みを支えていらっしゃるのが印象的でした。福井市酒生地区の青年グループ「さこう工務店」のリーダー (店長) である児川さんは、自宅の廊下の延長線上にあるように公民館で日常的に地域の仲間と集い、そのつながりの中で地区の子ども達のために動き、また他の地域 (ご報告くださったのは震災に見舞われた熊本) のために出来ることを実践しておられました。児川さんのその「当たり前」におそらく会場の多くの方が自分の「当たり前」を見つめ直したのではないかと思います。お二人は共に次世代を担う若い世代ですが、共通していたのは同僚や仲間と共に次の世代のためにできることを考え実践しておられることでした。シンポジストの聴き手であった探求ネットワークの学生さんは、世代が近い等身大のお二人のご報告に自分の実践を重ねたのではないのでしょうか。また、公民館主事さんをはじめとする社会教育にかかわる方達は、そうした若い世代の取り組みをどのように支えることができるのかについて、ご自分の実践と重ね考え進める機会となったのではないのでしょうか。私自身、自分の実践や大学のあり方を改めて考える機会となり、またお二人の報告からある地域の (取り組みの) 良さによって他の地域が支えられることを学びました。

お二人の報告を受け、SessionⅢのクロスセッションでは、5～6人ほどの小グループでお互いの実践を交流・共有し合いました。そ

こでは、若い世代の取り組みとそれを支えようとする方達の実践とが交わりながら、ゆるやかに結ばれているように思いました。

若い世代が活動を通して学び、 学びの場を支えている姿に刺激を受けて

神奈川大学「コミュニティ学習支援士養成講座」受講者 吉見 江利

ZoneC1「若者と地域」の会場はJR福井駅前、福井市中央公民館の入る商業施設のAOSSAでした。現在、横浜市教育委員会の嘱託職員として、生涯学習関係職員の研修を担当している私は、若い世代が地域と関わる難しさを感じており、ここに参加しました。

SessionⅠのポスターセッションでは、福井市、越前市の公民館や福井大学教育地域科学部の学生など、いくつかの活動団体が同時に20分程度でポスターを説明しました。教員を目指す学生と子どもの活動である、探求ネットワーク（以下探求ネット）の人形劇の活動では、1年生二人が発表していました。はじめは子どもとの台本づくりや人形づくりが思うようには進まず、子どもたちにどんな声をかければよいか悩んでいましたが、2年生に相談しヒントをもらい活動を改善する様子が説明されました。そして1年生の発表を温かく見守るように囲む2年生の姿に、1年生の実践をしっかり支える関係があると感じました。

SessionⅡの「持続可能なコミュニティをコーディネートする」では、二人のシンポジストの話の聞きました。みやぎ連携復興センターで震災後の地域の復興支援をしている高橋さんの「深い喪失感」という言葉から、復興支援とは、被災者が次の世代へ「経験」を伝える役割を自覚し、自分の足で一歩前に進んでいくことを支えていくことと捉えました。「さこう

工務店」という名で公民館のサークル活動をしている児川さんは、若者が気軽に集まることのできる場を公民館に作りました。その活動は楽しさを感じながら自然に社会と関わり、自らと周りを変えていく場となっていると感じました。二人の話より、人は体験や活動を自分事とすることで主体的になるということと、そのためには体験や活動を安心して行うことができる場と支える人の存在が重要であるということを学びました。

SessionⅢでは、中央公民館職員をファシリテーターに、福井大学探求ネットの2年生3名、福井大学出身の教育委員会生涯学習室職員と自分の6名で語り合いました。福井大学探求ネットでは、2年生は活動全体を見て1年生を支える役割を担っていることがわかりました。そして探求ネットが20年以上組織的な活動として継続していることに驚きました。また福井市公民館は昭和30年代から市内の小中学校区に1館設置され、公民館主事が地域の人の学びを支え継続されてきていることも確認しました。それぞれの活動が継続するには、時々活動を知らない人に説明し、外からの視点で客観的に見てもらい、その活動の意味や目的を自分たちで確認することが大切ということグループで共有しました。

今回の参加を通し、私は活動を通して学んだ若い世代が、継続的に安心して学べる場を

つくり、支えている姿に刺激を受けました。そこから、私は相手が安心して主体的に動こうと考えることができるような、継続的な学び

合いの場づくりを進めていきたいと考えました。お会いした皆さんから、次に進むヒントと力をいただいたことを感謝します。

発見!共感!!ラウンドテーブル

福井市殿下公民館 主事 堂下 未来

6月25日、福井ラウンドテーブルに参加し、3度目のポスターセッションを行いました。3度目の正直とはよく言ったもので、昨年から発表してきた中で一番良く出来たかと思えます。公民館関係の方からのアシストもあり、自分の実践や活動紹介、さらには地区の宣伝までする事が出来ました。人前で話す機会の少ない私には、毎回試練のごとく重くのしかかっていた時間でしたが、少し冷や汗の量が減ったように思います。しかし、場慣れしただけで、伝える事の難しさは相変わらずです。

シンポジウムではみやぎ連携復興センターの高橋さんと、さこう工務店の児川さんの若い発言を聞く事が出来ました。「自分は何がしたいのか?」「自分には何ができるのか?」これを突き詰めていった結果が今の活動に繋がっているそうです。シンプルですが、ものすごく説得力のある言葉でした。自分は大そうな事は何もしていない。ただ目の前にある『自分ができる事』をやっただけ……。あれもこれも頑張らなきゃと焦っていた気持ちが少

しラクになりました。

クロスセッションでは、報告者として聞き手として大変勉強になりました。それぞれ全く別のコミュニティの中で過ごしている報告者達ですが、実践や課題を突き詰めてみると、みんな人と人との関係性に行きつくように感じました。探求ネットワークの学生は自分と子供達との関わり方や子供同士の関係性について得るものと課題が入り混じっている様子がうかがえました。私も同じく地域の人とどう関わるかで事業や地域活性化につながると感じているので、学生の悩み・感動には大きくうなずく場面がありました。

ラウンドテーブルでは様々な考え方に触れる事ができるのがとても楽しいです。コミュニティが全く違っても、こんなに共感し合えるという事は素晴らしい事だと思います。次のラウンドテーブルにはどんな人と出会えるのか、どんな考えを吸収できるのか、今から楽しみにしています。



C2 地域と学校はいかに学び合うのか

大人も子どもも育ち合うコミュニティへ

もの・ひと・こと…そこに込められた思いが

見えるようになることへの期待

福井大学教職大学院 准教授 宮下 哲

0 はじめに

実践研究福井ラウンドテーブル 2016Summer Session(6/24-26)のZoneC2では、福井市越廼地区や長野県上田市の実践などをもとに、「地域と学校はいかに学び合うのか—大人も子どもも育ちあうコミュニティへ—」について問い進めました。それぞれの実践内容や会場からの声はどれも示唆に富むものばかりでしたが、異なる実践でありながら「大人と子どもがともどもに育ち合う豊かな実践のプロセスが語られる」ときに共通して聞こえてきた言葉があったことが印象的です。ここでは、その言葉をもとに、当日紹介された実践を振り返り、テーマに関わって私が考えたことの一部を記したいと思います。

1 「人や物やことの背景にある『思い』が見えてくることで、私の立ち位置が見えてくる」

越廼小学校の川崎先生は、越廼地区の魅力を探求する実践を報告されました。実践の過程で、川崎先生と子どもたちが意識を向けたのは、地域の魅力を支え自分たちの日常の様々な活動に「手を貸してくれる」地域の人々の思いでした。例えば、越前水仙という地域の魅力は、水仙そのものの力だけでなく、そこに関わる「あのおじさん」「あの中学生」の存在に気付き、その人々の思いであることを把握していきます。子どもたちは、「地域の魅力」という抽象的で感覚的な事柄の背景に、顔と

名前のある人の存在と思いを把握すると、ますます越前水仙やそれに関わる人を大切な存在と認め、自分もその思いをもつ者として活動に参加・参画しようと動き始めるというのです。おそらく、この頃の子どもたちは、地域の人を「手を貸してくれる」人ではなく、「ともに大切なものを守る」人と思っていたのではないかと思います。

同様のことは、上田市教育委員会の伴さんによる「荒れていた学校が地域の人のかかわりによって転回して行った報告」の中にもありました。生徒が、学校の美化に「手を貸してくれる」地域の人々の顔と名前や思いを知り、「あのおばさん」「このおじさん」が大切な存在になっていく頃には、学校の荒れが下火になっていったのです。生徒会活動の時間に、生徒と地域の人が、共に美化活動の計画を立て汗を流して整備するなど、地域の人と生徒が協働で活動することが日常的になるにつれ、地域の人が生徒を支えるとともに、生徒の成長が地域の人を元気づけるなど、大人と子どもが共どもに育ち合っていたのです。

2 「この活動の Fixer は自分たちだと、多くの人が言うようになっていく」

この言葉は、報告を聞いた参加者が、ご自身の体験も踏まえて話してくれた感想にあったものです。「人が見え、実践が見え、その思いが見えるようになると、『人と人との関係が見

えるようになるので、その関係の中に自分がどのように立てばいいのかが見えてくる』『実践と実践との関係が見えるようになると、次に自分がどのように実践するといいかが見えてくる』というのです。実践に参加する人の多くがそのような経験を重ねると、あの実践は私のもの、この実践はあなたのものと線引きすることの意味が薄くなり、むしろ人と人、実践と実践をつないで新たな関係や学びを展開する喜びを生み出すことが主眼になっていくという予感も込められた言葉のように思います。越廼公民館の実践では、公民館主事や地域の人の動きや思いが見えるようになっていくにつれ、地域の人が「ここはわたしがやるよ」「こんなことをしたらどうだい」と動き出したことが報告されていました。見えやすくなった関係性や思いを足場にして、みんながつなぎ役になって主体的に動くことが、活動の持続性を支えているように思います。

3 「見えなくなると、すぐに元に戻ってしまう」(まとめに代えて)

ところで、伴さんからの報告では、人や活動や思いなどが地域の人からも生徒からも見えにくい状態になると、生徒や教師が「地域の人には学校の手伝いをしてくれて当たり前」と思ったり、地域の人が「学校は地域の人間を無料で奉仕する支援員と思っている」と活動の意義を疑問視したりするなど、すぐに協働実践の主体者という認識は薄くなることもありました。具体的な個人の実践とその思いを、見えやすくしたり実感的にとらえやすくしたりすることが大切であることは示唆されましたが、実はこれを創造し、維持するための知見は、霧の中で霞んで見えていると思います。霞の中ではあるものの、確かに存在し光っているその知見を、私たちがもう少し確かに把握するためには、一つ一つの実践の中で、実践に関わる人々の行為とその時々思考や判断を、もう少し丁寧に捉えることが必要なのかもしれません。その探究を進める同志が、全国にこんなにもたくさんいるという実感を励みに、私の歩みを進めたいと思います。

「聞くこと」「語ること」の学びの深さを知るラウンド

玉川大学 教育学部教育学科4年 佐久間 歩

福井のラウンドテーブルには初めて参加させていただきました。いまだかつて、この2日間ほどじっくりと人の話を「聞き」、自分の実践を「語る」ことはなかったです。「聞く」、
「語る」ことによって自分の学びが深まっていく感覚が、2日間を通じてあり、自分の価値観が揺さぶられました。福井のラウンド1日目、2日目を通して、私自身が何を学んだのかを執筆しながら振り返りたいと思います。

1日目、私はZoneC2の「地域と学校はいかに学び合うのか」に参加しました。ポスターセッションでは、福井大の学生の実践をはじめ、

福井の公民館の実践を聞きました。

福井大の探求型の学習方法に関心をしました。学生が縦割り班のように異学年と協力して、地域と関わる実践をしていました。私も同じ学生の身。福井大の学生の実践を聞いて「負けてられないな」と悔しく思うと同時に、実践を聞いて、「自分でも何か実践ができるのではないか」と新たな実践へのやる気をいただきました。

福井の公民館の実践とともに、社会教育主事の方の悩んだことや教育に対する思いを聞

けて、私の教育観も深まったように感じます。その方に質問攻めをしてしまって、強欲にも2日目の報告資料までいただいしまいました。東京とは違った土地で実践されていること（加えて、学校教育でない社会教育のお話し）を聞くことができ、新たな実践への探究心が芽生えました。

シンポジウムでは、福井市の小学校と公民館の実践、そして長野県の教育委員会の実践を聞くことができました。福井や長野の実践は目から鱗でした。実践からは3人の先生方の熱い気持ちがひしひしと伝わってきました。地域や学校が、子どもの安心できる居場所になるためには、地域と学校が学び合うことが大切であり、その学び合いには、熱い気持ちをもった先生やコーディネーターが必要なのだと改めて気付かされました。素晴らしい実践に触れることができ、たくさん学ぶことができました。

2日目は、学生ながら報告をさせていただきました。私の報告を聞いていただき、じっくり

と考えを深めることができました。自分の報告よりも学びにつながったのは、他の実践を「聞くこと」でした。私自身が6月に小学校の教育実習を終えたばかりで、教育実習を振り返りながら長期実践を聞くことができました。特に、藤本先生の福井の教員研修の実践報告では、教員研修に始まり、学校としての組織の在り方など教育に関する多岐にわたるものに触れながらテーブル全員で考えを深めることができました。実践をもとに、生まれも経験も違う方々のお話を聞くことができ、自分の考えを深めることができる。これがラウンドテーブルのよいところだと思います。

福井ラウンドテーブルに参加できたことは、私にとって大きな一歩だと感じました。このような機会をつくっていただいた福井大学教職大学院の皆さま、誠にありがとうございました。微力ながら、こうした「聞くこと」「語ること」での学びの深さを周りに伝えていこうと思います。

長野県上田市上野が丘公民館 主事 小林 成子

長野から新潟県、富山県、石川県を經由し福井へと向かう長い道のりの車中内で、同乗の仲間たちとそれぞれの活動や日頃感じている話に花を咲かせながらのウォーミングアップがしっかりできたところで、福井大学に到着。「地域と学校はいかに学び合うのかー大人も子どもも育ち合うコミュニティへー」をテーマとしたZoneC コミュニティC2の会場へと向かいます。

シンポジウムでは、学校現場の先生、事業の主催者である公民館職員、学校と地域をつなぐコーディネーターとそれぞれ違った立場で子どもたちを真ん中にして地域と学校との連携を行っている皆さんの発表をお聞きしました。

越廼小学校川崎先生の発表にでてきた「青年会」、越廼公民館主事小畑さんの発表の中の「もらい湯」は、私自身が若い頃や幼い頃に実体験したことでした。なぜかお話を伺いながら、その当時のことが鮮明に思い出され感慨深い気持ちになりました。

また、いつも御指導をいただいている上田市教育委員会の伴さんの発表からは、今、大人が考えなければならないことや関わることの重要性を改めて考えさせられました。

発表された皆さんの活動を通しての想いが気持ちの中にずっと入り、活力をいただけた時間となりました。

1日目のグループセッションでご一緒した

福井大学の学生さんたちから、「探求ネットワーク」に参加している子どもたち一人ひとりのことを真剣に考え、仲間同士で意見をぶつけながらも進めている活動の素晴らしさを。そして、ファシリテーターの玉木さんからは、包容力溢れる進め方について学ばせていただきました。

2日目は、福井大学教職大学院で学ばれた後、学校現場に戻られた素直なお気持ちを率直にお話してくださった小林教頭先生、生涯学習への熱い想いととてもしなやかに進めている大学院生の小幡さん、学校全体がとても前進的な雰囲気の中学校教諭松下先生そして穏やかに的確に話しをまとめてくださった早稲田大学研究員の矢内さんという素晴らしい皆さんとご一緒させていただきました。

時間をかけて実践されているお話を伺っていると、イメージが広がりその時の情景や場面が浮かんでくるようです。

私も、悩みながら取り組んでいる活動を発表させていただきました。

ご一緒した皆様から、自分ではまったく気づかずに見落としていたことを見つけていただきました。そして、嬉しい指摘をしていただくこともでき、まさに「自己肯定感」が高まる時間を過ごすことができたと思います。

3回目のラウンドテーブルでも、新鮮な刺激とグループセッションでの心地よさや感動を味わうことができました。

皆様、本当にありがとうございました。



Zone D 授業研究

教師の資本を授業研究によっていかに培うのか

子どもと教師の学びを支えるために

福井大学教職大学院 准教授 木村 優

Zone D では、前回に引き続き「専門職の資本」という考え方を提案させていただき、「教師の資本を授業研究によっていかに培うのか」をテーマとして各 Session を進めていった。

Session I では、福井県内外の小中学校や高等学校からそれぞれの授業研究の取組をご報告いただいた。

Session II シンポジウムでは、高浜町立青郷小学校の砂原亘教諭、福井県立丹生高校の小川駿也教諭より、それぞれの学校において

子どもたちにいかなる力を育てたいのか、それに基づいていかなる授業実践に挑戦し、授業研究を通して先生方同士で実践の挑戦をいかに共有し、子どもたちの学びをいかに見取り、実践をいかに改善していつているのかをご報告いただいた。砂原教諭と小川教諭のご報告を受けて、福井大学教育学部附属中学校の牧田秀昭副校長より、(1) 授業研究における時間性を担保した子どもたちの学習過程の分析の重要性、(2) 子どもたちの学習過程を見取ることの決定的重要性、(3) 授業研究を基軸とした教師の同僚性構築に向けた指針と子どもたち及び学級に培いたい文化との相同性、の3点が主に示された。牧田副校長のコメントを受け、砂原教諭と小川教諭が改めて各学校の授業研究の意義と方法を述べてから、参会者の皆様にも協議いただき、会場全体で各自の授業研究の取組を含めながら議論を深めていった

以上のシンポジウムの報告と議論を受け、Session IIIでは3つの講義室に分かれ、「学校における授業研究の多様性から学ぶ」、「協働連携による授業研究」、「高校における授業研究の発展」をテーマとして、参会者全員で教師の資本を培う授業研究の可能性について話し合った。

今回の Zone D における一連の議論により、授業研究に包摂する教師の専門性開発に資する力を十二分に引き出すために、子どもたちに培いたい力を明確にして授業を実践し、授業研究を進めていくことの大切さが示された。

次回も引き続き Zone D では、教師の資本を培う授業研究の奥深さと卓越さを参会者の皆様とともに協働探究していく。

実践研究福井ラウンドテーブルに参加して

福井県立丹生高等学校 教諭 小川 駿也

私と実践研究福井ラウンドテーブルとの出会いは、福井大学教職大学院へ進学する直前の2012年春のセッションであった。それから4年余りの歳月が経ち、高校教員となった今もラウンドテーブルにおける出会いや発見は、私自身に大きな刺激をもたらしている。

2016年6月の夏のセッションにおける Zone D 「授業研究」では、「教師の資本を授業研究によっていかに培うのか」というテーマのもと、福井の授業研究についての報告を話題提供として、実践交流が行われた。私はその中で、所属する全日制普通科の福井県立丹生高等学校における授業力向上の取組みについて報告させていただいた。本校では、昨年度から、普通クラスでは生徒の学習

意欲を高め、基本的な学習習慣の確立を目指し、特別進学クラス・中高一貫連携クラスでは、大学入試などの実践問題を通して応用力の育成を目指し、それぞれの教科で目標を設定し、授業公開や授業参観、近隣の丹南高等学校との連携などに取り組んでおり、そのことを具体的な場面を挙げながら報告させていただいた。

報告後、福井大学教育学部副校長である牧田秀昭先生から丹生高校の授業力向上の取組みについて、「教職員が自ら目標を設定し、お互いが教科の枠にとらわれずに授業を参観しやすい雰囲気をつくり出していることがあるのではないか」という主旨のお言葉をいただいた。私が丹生高校に赴任した2年前

には、丹生高校の授業研究の取り組みは始まっており、赴任当初から授業力向上チームに所属している。丹生高校の授業力向上の取り組みが教職員全体の共通理解のもと、緩やかに発展しながら続いている背景には、教職員の無理のない形で取り組みを行い、それによって「自分の学級の生徒はどのような様子なのだろう?」、「あの授業みたいに、自分の授業も工夫して取り組んでみよう」というような次への実践意欲が生まれているのではないだろうかと考えた。

高校における授業力向上を考えたときに、教科の壁というものが大きい。高校3年間でどのような生徒の育成を目指し、そのためにどのような授業を行っていくのかということを考え、授業力向上に取り組んでいく必要があると感じた。

生徒に育む学力観の転換と大学入試改革により、高校における授業改革はますます真価が問われている。このラウンドテーブルで学んだことを生かしながら、丹生高校の授業力向上の取り組みをさらに進めていきたい。



とにかくやらずに

兵庫県丹波市立中央小学校 校長 安田 和仁

「なんか横文字とカタカナがいっぱいで、中身がよく分からんなあ」などと、ダウンロードした案内チラシを話のタネにしながら、車中でわいわい言いつつ福井大学に到着した。早速越前そば屋さんで昼食を取り、お腹も一杯になったところで、いざ Zone D に参加である。

木村先生の「『専門職の資本』を培う」のプリントをいただき、テーマである「教師の資本を授業研究によっていかに培うのか」を早く理解して、参加者の皆さんと同じスタートラインに立たなければと、たいへん焦った次第です。でも、書かれていることや求めておられることは、切り口が異なるだけで、私自身が教職経験の中から、学んできたことと似ている

ことに気づき、ちよっぴり安心した。私自身は常々、「教師の授業力は、①『教材分析力』×②『指導技術』×③『子どもを知る力』+④α」であり、最後の「④α」は、「教師になりたいと思ったときのエネルギーであり、子どもをどれだけ好きかというエネルギー」だと考えている。

たくさんの人でいっぱいだったポスターセッションに参加したが、学校だけではなく公民館活動の発表もあり、感心した。これは、「丹波ふるさと教育」で再度地域との連携の大切さが言われ、本校でも学校支援コーディネーターをお願いして、応援メンバーを再公募している次第である。隣同士の公民館活動の連携もされていることで、大変参考になり、希望を感じた。

シンポジウムでは、高浜町立青郷小学校の砂原先生から「子どもと教師の学びを支える授業研究」の発表、福井県立丹生高等学校の小川先生から「授業力向上の取り組み」の発表を興味深く聞かせていただいた。附属中副校長の牧田先生のコメントがあったお蔭で、お二人の発表の値打ちがよく分かった。『子どもを見取る』ことの意味や重要性を強く感じた次第である。

自分のクラスが子どもの居場所になっているかの点検を5月の終わり頃に話をしたことがある。「子どもを知る努力をしましたか」(作文・日記・遊ぶ・話す・面談・身辺雑話など)、「子どものコップの大きさは分かりましたか」(子どものコップは小さい。一人ひとり違うコップ。),「ほめる種をまきましたか」(ほめることの大切さ,ほめる種をまくことの大切さ),「ほめることばの中で一番大切なことを大事にしていますか」(どういう言葉がよくて,どういう言葉がだめなのか),「ほめることに比べ,叱ることは容易でない」,「配り物のときのルール,集めるときのルールはありますか」(教室のしつけは,やれば成功することから)等々である。

「子どもを見取る」の意味を考えていくと,授業改善につながり,まさに学級づくり

につながる。その後のフォーラムAでは,各地域の研究推進の方々に来ており,グループごとに各自の悩みなど意見交換した。

その中で感じたことは,「わたしたちは,一人のスーパースターを育てているのではない。一人ひとりに確かな力をつけてナンボの教育をしている」。これは,1時間の授業後でも言えることであり,1単元の指導後でも,学期末でも,学年末でも,小学校卒業時でも言えることである。だから見栄えのよい,あるいは見た目に派手な授業でなく,子ども一人ひとりに力がつく授業を求めている。言い換えれば,教師主導型の教育活動だけでも,子ども中心型の教育活動だけでも駄目である。目的とするところに従って両者を組み合わせて実施する学習指導計画が不可欠である。

27日月曜日には,木村先生が本校に来てくださり,授業研究会に参加していただき,「子どもを見取る」の実際を話していただいた。そこで再度,日々の授業の有り様や,子どもたちを見る目の大切さを振り返らせていただいた。「とにかくやらなくちゃ」と若い教師が言いました。ありがとうございました。

福井ラウンドテーブルでの学び

長崎市立西浦上小学校 教諭 野口 将信

現職院生3人で,長崎駅を出発したのは朝の7時半であった。福井大学に行くのは3人とも初めてで,車中は少々旅行気分楽しくすごしていた。福井駅に着いたのは午後2時すぎで,長崎と同様に雨が降っていた。到着後すぐに永平寺へと向かった。永平寺の荘厳な雰囲気と古来の大木から発するマイナスイオ

ンで,心も体もリフレッシュし,翌日の福井ラウンドテーブルにさわやかな気分で参加することができた。

1日目は,午前中に中高生によるポスターセッションが行われた。驚いたのは学生たちの質問に対する受け答えである。参加者から

の難しい質問に対しても、メンバーの中の誰かが自信を持った態度でさっと答えており、質疑が滞ることがなかった。学生たちの堂々とした態度に、福井の教育の成果の一端を見た思いだった。午後からは Zone D に参加した。私はフォーラムで発表を控えており、やや緊張感を持ちながら参加した。シンポジウムでのお2人の発表は素晴らしいものであった。先生方が、試行錯誤する中で、研究を積み重ねていったことが伝わってきて、福井の教育力のもとが、先生方の日々の努力にあることを知った。フォーラムでは、いよいよ私の発表の番となった。私は「長崎県離島地区における小学校英語教育の実践と授業研究の実際」と題し、五島列島の小さな小学校での校内研究について、経験して学んだことを発表した。研究がうまくいかずに悩んだことや、授業研究の在り方への考え、先輩教師の姿に学んだ経験などについて話をした。離島での英語科の構築という特殊な状況であり、参加者にとって参考になるか不安であったが、参加した先生方には熱心に聞いて頂いた。発表後のグループトークでは、他県での授業研究の様子を聞

くことができた。地域によって取り組み方に大きな違いがあり、自分が当たり前だと思っていたことがそうではないことに気づかされた。また、自分の悩みや疑問に対する解決のヒントがたくさん得られた。違う地域の知らない者同士が語り合うことのメリットを実感し、これがラウンドテーブルならではの学びだと感じた。

2日目は、6人グループでの語り合いが行われた。私は聞き手であったが、違う校種の先生方の実践や悩みを聞いたり、他県の教職大学院での取り組みを聞いたりする中で、様々な意見が飛び交い、多くのことを学ぶと同時に刺激も受けた。長時間であったが、あっという間に感じられた。

初めて経験した福井ラウンドテーブルでは、違う視点からの考えをたくさん聞くことができ、思った以上の収穫を得た。参加して本当によかったと思っている。今後もこのような学びのチャンスがあれば、積極的に参加したいと思う。



※いただいた原稿のご所属等についてはすべて平成28年7月時のものです。

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2016 spring sessions

福井大学総合研究棟Ⅴ（教育系1号館）・共用講義棟

2/17 (fri) *pre-session* 17:30-18:40

2/18 (sat) *orientation, session I ~ III* 12:40-17:40

Zone A : 学校 Zone B : 教師教育 Zone C : コミュニティ Zone D : 授業研究

2/19 (sun) *SessionIV Round Table Cross Sessions* 8:20-14:00

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

現在、鋭意企画中。決まり次第順次ホームページ等でお知らせしていきます！

【編集後記】今回もラウンドテーブル後に参加者の方から多くの声を頂戴し、特集号を発行する運びとなりました。いただいた原稿は書いてくださった方にとっての記録であると同時に、福井ラウンドテーブルの大切な記録でもあります。5年後、10年後、書いてくださった方がこの記録を読み返して下さること、またコミュニティづくりに取り組んでいらっしゃる誰かが手に取り読んで下さること、そうしたことを願い想像しながら編集しました。原稿をお寄せくださった皆様ありがとうございました。（半原芳子・私市聡美）



教職大学院 Newsletter **No.89**

2016.10.15 内報版発行

2016.10.31 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp